

子どものための芸術文化活動 －「成長のための芸術」プロジェクトを事例に－

外国語学部 小 林 純 子

はじめに

パリ市は、子どもと美術館などの文化施設との持続的な関係を可能にする文化活動の諸プログラムに財政支援を行い、さまざまな芸術表現に親しむことを目的とした「成長のための芸術 Art pour grandir」プロジェクト（以下、APG）を実施している。

このプロジェクトの特徴は、第一に、学校や余暇センターなどの公的教育機関に登録している子どもを対象としていることである。第二に、美術館などの文化施設を通じた文化の普及を目指していることである。第三に、参加者としての子どもは、演劇であれ、音楽であれ、造形芸術であれ、共同で作品をつくりあげることである。そこでは、芸術文化活動が誰を対象としているのか、活動においてどのような実践を行うのか、活動が何を目的とするのかが、あらかじめ方向付けられている。

芸術文化を対象とした研究の範囲は、作品や作家のみならず、作品が生産される環境や条件、芸術文化を実践する参加者、参加者と作品の相互作用など、さまざまな領域にわたる。このうち、参加者を研究の対象とした社会学的アプローチが発展したのは1960年代ころであるとされる。ブルデューは、余暇や文化の普及などについて一連の業績を残し、「文化実践やその参加者は、選別や社会カテゴリーへの所属という基準によって決まる選択に応じて形成される」とした¹。ブルデューにとって個人の選択と考えられるものは、所属する社会カテゴリーの価値を内面化した結果である。内面化のメカニズムは学校教育機関によって形成され、その人物の文化を形成する。こうしたブルデューの理論を批判的に検討したムクトゥリは、参加者は、むしろ社会的・政治的な複合的プロセスから成り立っていると述べる。ムクトゥリにとって「参加者は一度だけ形成されるひとつのグループではなく、形成されては解体され、時代に応じて異なる社会的集団から形成される生きた組織」である²。このような見方は、参加者を固定的なもの、社会カテゴリーに拘束されたものとする捉え方から解放する。

APGの参加者は公的教育機関に所属する子どもたちから成り立っている。プログラムには人数枠が設定されており、その範囲で参加者は制度的に選別される。そこで行われる文化実践は、かれらが自由に選んだ結果ではなく、政策によって「文化」と

して設定されたものである。その文化は、家庭によってはアクセスが限られたもの、あるいはそこにアクセスするには家庭に知識や資本が求められるような「文化」である。APG は、こうしたある種の序列化された「文化」へのアクセスを、社会カテゴリーに関係なく、等しく保障することをうたっている。この意味で、APG の文化実践とその参加者は社会カテゴリーからの解放を目指しているようにみえる。しかしそれは実際にそのような効果を生んでいるのだろうか。制度化された芸術文化活動において、参加者、作品、文化施設や教育施設のそれぞれにはどのような特徴があり、それらは相互にいかなる関係におかれているのだろうか。

1. 「成長のための芸術」プロジェクトの目的

APG は 2009 年から始まり、2013 年の新学期（9 月）に活動の 5 年目を迎えた。パリのすべての子どもと若者の、文化ならびに芸術文化機関へのアクセスの促進を目的とした諸活動の枠組みで、そこにはさまざまなプログラムが含まれている。この目的の背景には、文化や芸術文化機関へのアクセスは家庭によって異なり、中には経済的手段をもたないためにそこへのアクセスが限られている家庭もあるという認識の共有がある。たとえば APG コーディネーターの一人は、プロジェクトに関する市の役割を「家庭では経済的手段の欠如から美術館や劇場や映画館などにアクセスできず、手に入れることのできないパリの伝統的な文化を提供すること」と表現している³。

パリ市が発行したパンフレット「学校周辺活動教育憲章」には、APG を含むパリ市による余暇活動や放課後活動の基本方針が明記されている。それは「子どもの豊かな成長を支援すること」、「共に生きることを学ぶこと」、「平等を目指して働きかけること」の 3 つである。このように、APG は「文化、新技術、スポーツ、環境の発見」などの機会を子どもたちに等しく提供し、出自や性別の違いを乗り越えすべての子どもが共に生きることを学ぶという方向性をふまえたプロジェクトなのである⁴。これは文化実践へのアクセスの民主化、すなわち文化実践の社会カテゴリーからの解放の目的を明確に示したものだといえる。

それでは、APG で提供されている「文化」は具体的にはどのようなものを指しているだろうか。APG の一般向けパンフレットには、このプロジェクトの目的は「子どもたちが美術館、音楽、現代美術、写真、演劇、デジタルアート、曲芸、詩、ビデオ、ドキュメンタリー映像、映画、舞踊、建築などと親しむこと」と記されている。しかし携帯電話やインターネットをはじめとする情報通信技術やその端末機器に囲まれた現代社会を生きる子どもにとって、写真、音楽、デジタルアート、映画やビデオな

どは、伝統文化というよりはむしろ身近に感じられるものなのではないだろうか。なるほど確かに、パソコンやカメラなどの機器を手に入れることが困難な家庭もあるかもしれない。だが、こうした「文化」は果たしてアクセスしにくいものなのだろうか。

表1は、APGの枠組みにおいて2013-2014年度に行われた活動を分野ごとに分類したものである。諸々の活動は美術館との共同活動、映画や写真に関連した活動、文学に関連した活動、人形劇や曲芸をふくめた演劇や舞踊に関連した活動、パリの市立コンセルヴァトワールを中心とした音楽活動などにまとめられる⁵。これらの活動は、前年度から継続して行われているものである。そのほか、特定の中学校を対象とした

【表1】「2013－2014 成長のための芸術プログラムリスト」（ ）内は学校数

分類	関連諸機関	活動タイトル	活動内容
美術館	パリ市立現代美術館、初等学校（8）、中学校（4）、高校（3）、院内学校（3）、受け入れ施設（1）	FMAC à l'école	学校における現代美術館展
	パリ市立近代美術館、プチ・パレ、カルナヴァレ博物館、セルヌチ美術館、ルクレール・ド・オートクロークジャン・ムーラン記念館、ヴィクトル・ユゴー館、コニャック・ゼ・美術館、ブルテル美術館、ロマン主義美術館、余暇センター（48）	Au pays des musées	余暇センターがパリ市立の美術館、博物館のひとつとペアになり、施設での鑑賞や鑑賞を通じたオリジナル作品の制作を行う
	近代美術館、ヴィクトル・ユゴー館、バルザック館、初等学校（3）、中学校（2）	Ecoles amies des musées	各学校がいずれかの美術館と継続的関係を維持する
映画・写真	映画館（18）、保育学校（192）	Mon premier cinéma	映画館の訪問と作品鑑賞
	パリ市庁舎展覧会課、小学校（9）	Le Département des expositions de l' Hôtel de Ville	写真家ブラッサイに捧げられた展覧会をめぐるプログラム
	多目的広場バル、中学校（9）	Le Bal – Mon journal du monde	教育チームとアーティストないし写真の専門家とともに写真を使ってモニターや新聞をつくる
	多目的広場バル、小学校（5）、余暇センター（5）	Le Bal – Regards Croisés	映像制作のアーティストとドキュメンタリー映画をつくる
	ヨーロッパ写真センター、演劇イメージセンター、パリ104、余暇センター（60）、小学校（10）	Objectif Photo – le Pari(s) en lettres capitales des enfants	子どもたちが「公共空間における書かれたものの存在」というテーマでオリジナルの写真作品を撮る
文学	「評論と映画」アソシエーション、中学校（3）、余暇センター（7）、初等学校（13）	Le Festival Parisien du film scolaire et périscolaire	子ども、教師、アニメーター、外部指導者が視聴覚作品の制作と体験の多様性を発見する
	ロベール・リネン映画センター、小学校（1）	La cinémathèque Robert Lynen	写真と映画の実践
	芸術研究教育センター「ジェスチャー・イメージ館」、中学校（1）	La Maison du geste et de l'image	ビデオと写真から独自の写真や短編ビデオを制作
演劇・舞踊	フォルネ図書館、小学校（2）	La Bibliothèque Forney	さまざまな保存資料（美術、装飾芸術など）を利用して子どもたちが中世の生活の多様性を本にしてい
	国立詩作品リソースセンター「詩人の春」、中学校（1）	Décalages présents	声、朗読法、音の反響、場、配置、読解、視線、想像力などに焦点をあてた芸術実践、詩作、文章のアトリエ
	仮面芸術文化スペースヴァルソリアカンパニー、中学校（1）、小学校（1）	La Compagnie Varsorio	仮面演劇アトリエの実践
	人形劇センター素手劇場、余暇センター（1）	Le Théâtre aux mains nues	人形劇をめぐる感受性を高め現代的創作に取り組む
	サーカス大道芸共同組合、ピエロショーカンパニー、ラスカブルーズ劇団、小学校（1）、余暇センター（1）	De Rue de Cirque	ピエロと大道芸をめぐる芸術アトリエを行う
	パリ市立劇場、アベス劇場、モンフォール劇場、グラン・バルク劇場、国際都市劇場、モントリュイ劇場、余暇センター（16）、初等学校（20）、中学校（7）	Parcours Enfance et Jeunesse	さまざまな分野のショーの鑑賞、演技や舞台空間の概念・解釈に関する実践的アトリエ
	エスターレカンパニー、中学校（1）	Le théâtre avec la compagnie estrarre	中学生向け演劇アトリエ
	人形劇芸術劇場ムフタル、小学校（1）	Le Mouffettard – Théâtre des arts de la marionnette	演劇アトリエ
	デュノワ劇場、小学校（1）	Le Théâtre Dunois	ウヴール・ド・ボシブル・カンパニーとのダンス
	デュノワ劇場、小学校（1）	Le Théâtre Dunois	メトニミー（換喩）を使ったある家族をめぐる演劇アトリエ
音楽	トゥツティ・カンティ・カンパニー、中学校（1）	Le Théâtre 13/Seine	トゥツティ・カンティ・カンパニーとの演劇
	パリ5区コンセルヴァトワール、職業高校（1）	Le Conservatoire du 5ème	障害をもった聴衆向けのダンス教室
	パリ11区コンセルヴァトワール、保育学校（1）、中学校（1）	Le Conservatoire du 11ème	中学校のオーケストラ（ジャズ）、保育学校における中国伝統舞踊
	パリ12区コンセルヴァトワール、中学校（1）	Le Conservatoire du 12ème	現代舞踊クラス
	パリ8区コンセルヴァトワール、小学校（1）	Le Conservatoire du 8ème	小学校のオーケストラ（トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバ、パーカッション）
	パリ10区コンセルヴァトワール、小学校（1）	Le Conservatoire du 10ème	教育優先地区小学校のオーケストラ（弦楽四重奏用楽器）
	パリ17区コンセルヴァトワール、中学校（1）、小学校（1）	Le Conservatoire du 17ème	学校の二つのオーケストラ（木管楽器と金管楽器）
音楽	パリ18区コンセルヴァトワール、中学校（2）、小学校（1）	Le Conservatoire du 18ème	小学校のためのヴァイオリンとマンドリン、中学校のための吹奏楽器（フルート、サクソフォン）、中学校の音楽
	パリ19区コンセルヴァトワール、中学校（1）	Le Conservatoire du 19ème	中学校のオーケストラ（フルート、オーボエ、クラリネット、サクソフォン、トランペット、ホルン、トロンボーン、パーカッション）

出所：Marie de Paris, L'Art pour grandir, « Les projets 2013-2014 » (consulté le 02/02/2015)

http://www.paris.fr/accueil/societe/l-art-pour-grandir/rub_9651_dossier_85171_port_23756 より筆者作成

さまざまな活動がある。これらを演劇・舞踊型、音楽型、文学型、映画・写真・絵画型、複合型に分類すると、演劇・舞踊や音楽に関連した活動が比較的多いことがわかる（表 2）。注目すべきは、各活動内容にみられる文化へのアプローチの方法である。

【表 2】「2013 - 2014 成長のための芸術プログラムリスト（芸術家たちのレジデンス）」

活動内容	中学校の数
演劇・舞踊型（上演、シナリオ書き、朗読、ダンス、サーカス、人形劇、舞台装飾など）	12
音楽型（ヒップ・ホップ、オーディオガイド録音、協奏曲、交響曲など）	9
文学型	3
映画・写真・絵画型（グラフィティ、写真）	2
複合型（演劇、舞踊、歌、楽器、文学、写真など）	5

出所：Marie de Paris, L'Art pour grandir, « Les projets 2013-2014 » (consulté le 02/02/2015)

http://www.paris.fr/accueil/societe/l-art-pour-grandir/rub_9651_dossier_85171_port_23756 より筆者作成

紙幅の関係で活動内容の記述が不十分なものもあるが、たとえば、表 1 の映画・写真に分類される活動で、60 以上の余暇センターといくつかの小学校がヨーロッパ写真センターなどの文化機関と行っている「写真レンズー子どもたちの大文字（首都）の挑戦（パリ）Objectif photo – le pari(s) des enfants」というプログラムでは、毎年テーマが決められ、写真専門家やアニメトゥールや美術の教師の助けを借りて子ども自身が作品をつくりあげる⁶。写真活動に携わったアニメトゥールによれば、この活動は全 5 回で構成され、写真関連のアーティストとアニメトゥールが協同行う活動である。カメラは文化機関から貸し出しされ、アーティストとともにカメラの使い方などの技術面を学ぶと同時に、パリの街に出て実際に撮影を行う。その後アニメトゥールとともに子どもはこれまでどのような写真を撮ったのか、何を行ったかを確認し、撮った写真を切り貼りしながら一つのノートをつくる。この一連の作業は余暇センターごとに行われる。こうして作り上げられた余暇センターのすべての作品や写真は、アーティストとともに選ばれ、最終的に展覧会で公開される。

2013 - 2014 年のテーマは「公共空間における書かれたものの存在 La présence de l'écrit dans l'espace public」である。2012 - 2013 年のテーマは「目に見えないパリ Paris invisible」であった。パリ市が公開している活動の記録映像をみると、普段私たちが気づかないような子どもの視線が写真に収められ、子どもからみたパリが写し取られている様子がわかる。2011 - 2012 年のテーマは「多文化のパリ、国際性のパリ Paris multiculturel, Paris cosmopolite」であった。作品集をみると、子どもたちの作品はセンターによって実にさまざまである。あるセンターの子どもは、肉屋の値札に付いている中国語、モスクに見られるアラビア語、テイクアウトのできる店の看板に見られるヘブライ語や英語、駅名に付いているフランス語など、街に溢れる様々

な文字を撮影している⁷。また別のセンターの子どもは、街に行く様々な人々のポートレートを撮影し、そのまま並べたり、それを自分の顔に重ねたりしている。あるいはまた別のセンターの子どもは、顔写真を切り、同じように切った顔写真のパーツと組み合わせたコラージュを世界地図の上に置いている。さらに別のセンターでは、日本料理、アフリカの料理、中国料理などのレストラン、食材、衣服、オブジェなどを色別に並べた作品をつくり、また別のセンターでは子どもたちが日本の着物、チャイナドレス、マルチニークのドレスなど、民族衣装をまとして写真を組み合わせた作品をつくっている。

この活動は「イメージの受動的な消費者としての子どもが知識をもった愛好家となり、自らの想像の領域を規定していくことができるようになるには、彼らの鋭敏なまなざしをどのように育てたらよいのか」と問いかける⁸。そこでは、子どもは写真活動において自分の好きなものを自分の機器で撮影し、撮影されたものを保存し、ただ眺めるだけではない。かれらは共通のテーマに自分の視点を提供し、共同制作の作品として公に向けて発信し、そして共有するのである。「文化」の活動に携わり、作品をつくりあげるといふ参加の仕方は、他のほとんどの活動でも同じように見られるものである。映画においても単に作品を鑑賞するのではなく、子どもたちは撮影するものとして参加していることが分かる。演劇においても、子どもは観客として上演作品を眺めるだけでなく、自ら作品に関わる表現者として参加する。ときにはシナリオや音楽を考えることもある。参加型にすることに伴う困難も存在する。演劇活動に携わるアニメトゥールによれば、演劇は継続的な練習を必要とするが、子どもの興味は様々な方面に向かうので、最後までやり通せない子どもも現れるためである。このため、役が決まってからは、途中で演劇をやめることがどのような効果を生むのかを子どもに考えさせることもアニメトゥールの役割となる。

このように、APGは「文化」へのアクセスを保障しているだけではない。プログラムが提供している「文化」がたとえ容易に手に入るものであっても、あるいはこうした「文化」が容易に手に入るものであるからこそ、APGはそのような文化とどのように関わるべきかを学ぶ場になっているといえる。文化との関わり方を知ることとは、「文化」を消費するだけでなく、その創造に主体的に関わることのできる態度を形成するために極めて重要な役割を果たしている。またAPGの活動は多様性に富んでいるため、「卑近な現代文化」と「高尚な伝統文化」という序列化をなくし、文化実践を民主化する役割も果たしている。

2. 「成長のための芸術」の参加者

APGの活動においては芸術文化機関と、教育機関（保育学校、小学校、中学校、高校、余暇センター、院内教室など）とが組み合わされ、「小学校、余暇センター、芸術文化機関、アーティストのつながりを発展させる」ことによって、その目的である「文化へのアクセス」を促進しようとしている。

たとえば、美術館に分類される活動のうち、「美術館の国で Au pays des musées」(以下、APM) というプログラムは、市内の余暇センターのいくつかが、それぞれパリ市立の美術館のひとつと「姉妹関係」を結び、美術館での鑑賞や、鑑賞を通じたオリジナル作品の共同制作を行う。パリ市のウェブページで APM に関与しているとされる市立美術館は9つあるが、パリ市立の諸美術館（博物館、資料館、記念館などを含む）を統括して運営を担う公的機関「パリ・ミュゼ」は、市立美術館を14としている⁹。これらの美術館は、作品数においても施設面積においてもルーブル美術館やオルセー美術館などの国立美術館より規模が小さく、一般の来訪者が少ないため、子どもの教育活動の場として利用しやすいという特徴をもっている。実際、夏期長期休暇中に市立美術館を訪れると、子どものグループが指導者の大人を囲んで話を聞いたり、活動をしたりしている様子をたびたび目にする。APGのコーディネーターによれば、これらの美術館は市立であることから、市の活動として余暇センターが施設を利用する場合にも費用は生じない。またどちらも市の管轄であるため連絡がとりやすいという利点もある。

とはいえ、すべての余暇センターがこれらの芸術文化施設を有効に利用できるとはかぎらない。施設が余暇センターか

【表3】「地域県別美術館数」

地域県	美術館数
NORD-PAS-DE-CALAIS	46
PICARDIE	38
HAUTE-NORMANDIE	41
BASSE-NORMANDIE	50
BRETAGNE	36
PAYS-DE-LA-LOIRE	52
POITOU-CHARENTES	43
AQUITAINE	56
MIDI-PYRÉNÉES	74
LANGUEDOC-ROUSSILLON	58
PROVENCE-ALPES-CÔTE D'AZUR	118
RHÔNES-ALPES	106
AUVERGNE	32
LIMOUSIN	11
CENTRE	65
ÎLE-DE-FRANCE	137
CHAMPAGNE-ARDENNE	34
LORRAINE	39
ALSACE	48
BOURGOGNE	69
FRANCHE-COMTÉ	33
CORSE	9
Guadeloupe	5
Guyane	3
Martinique	6
Reunion	5
Saint-Pierre-et-Miquelon	1

出所：Ministère de la culture et communication,
« MUSEOSTAT2009 », p. 24 より筆者作成。

ら地理的に遠い場合は利用が現実的に難しい。施設が集中する地区とそうでない地区の間には明白な地理的格差が生じることになる。フランスの文化コミュニケーション省によれば、美術館・博物館はイル・ド・フランス地方（首都パリを含むパリ県、セヌ・エ・マルヌ県、イヴリーヌ県、エッソンヌ県、オー・ド・セヌ県、セヌ・サン・ドニ県、ヴァル・ド・マルヌ県、ヴァル・ドワーズ県）に集中している（表3）。さらに、美術館への来場者数が年間1万人を越える県を6つ取り上げた表4から、パリには56の美術館が集中していることが分かる。このように、APMにおいてコラボレーションが可能な教育機関の数は、地理的・財政的・運営的制約により大きく左右される。

他方で、芸術文化施設のほうでも、受け入れ可能な企画の規模や子どもの人数には限界がある。たとえば、コンセルヴァトワールの活動は、ひとつの教育機関との協同で行われることがほとんどである（表1）。また、小さな劇場についても、受け入れ人数の限界から、協力して活動できる教育機関はあまり多くない。比較的大きな美術館でさえ、一般来場者を受け入れながら子どものための教育活動を運営することは、人数制限を行わなければ不可能である。それゆえ、毎年APGに関わることのできる教育機関は、2010－2011年以降大きく前進している中学校を除き、小学校と余暇センターでそれぞれ総数の40パーセント未満にとどまっている（表5）。

しかしAPMは教育機関を通じて美術館と子どもをつなぐプログラムのひとつにすぎない。ルーブル美術館やオルセー美術館などの国立美術館でも、美術館独自の子ども向けのプログラムは用意されており、余暇センターの普段の活動においてAPMの枠外で美術館訪問を取り入れる場合もあり得る。ただしその場合も、美術館を利用し

【表4】「県別美術館数」

県	美術館数
Paris	56
Yvelines	17
Nord	31
Calvados	23
Alpes-Maritimes	32
Bouches-du-Rhône	41

出所：Ministère de la culture et communication, « MUSEOSTAT2007 », p. 10 より筆者作成。

【表5】「成長のための芸術APGに関わった教育機関の割合」(%)

	小学校	中学校	余暇センター
2013-2014	39	63	32
2012-2013	38	57	31
2011-2012	38	57	30
2010-2011	37	35	30

出所：Marie de Paris, L'Art pour grandir, « Les projets 2013-2014 » (consulté le 02/02/2015)
http://www.paris.fr/accueil/societe/l-art-pour-grandir/rub_9651_dossier_85171_port_23756 より筆者作成

た活動を行うかどうかは、アニマトゥールが積極的な姿勢をもつかどうか、教育機関から美術館への移動が容易かどうかによって左右される。APG コーディネーターによれば、美術館の種類や場所、作品に関する知識、美術館で行われている活動の情報を活用でき、さらに移動手段も財政的手段も持ち合わせているため、APM を利用せず子どもを自分で文化施設に連れてゆく家庭も存在する。

以上のように、子どもの芸術文化活動のために美術館等の公的施設を利用することには、制度的にさまざまな限界があり、その点において APG には課題が残されているといえる。

3. 「成長のための芸術」の展開

それでは学校において、また余暇センターにおいて、APG の諸プログラムは具体的にどのように実施されているのだろうか。APG の諸プログラムは基本的に授業期間中の活動であり、学校の長期休暇期間中、とりわけ夏季休暇中には余暇センターにおいても行われていない。

たとえば中学校では、「芸術家による参加の教育的側面」に関する通達（2010 年 3 月 5 日）をもとに、「芸術家たちのレジデンス *les résidences d'artistes*」を 30 の中学校で実施している¹⁰。この通達は全国の小・中・高の各学校が連携して芸術家を迎え入れ、芸術文化教育を振興しようとする枠組みを示したもので、「地域の特徴を考慮した新しい活力」を取り入れることを目指している。2010 年の通達は、学校教育のカリキュラムに美術史をおくことや、学校における芸術関連の特別な時間、授業後の教育随伴支援時における芸術文化実践を促す「芸術文化教育の発展」に関する 2008 年の通達をふまえたものである¹¹。教育随伴支援とは、放課後に教育省が学習支援やスポーツや芸術文化活動を行うもので、主な担い手を教師とする。教育随伴支援のほとんどは中学校で実施されている。パリでは、こうした中学校の「芸術家たちのレジデンス」のプログラムが APG の一部を成している。このように、APG が学校教育機関と共同で行われる場合には、学校内外の既存の教育活動の枠組みのなかで利用されることもある。

いっぽう余暇センターは、授業期間中は水曜日の午後に子どもを受け入れる。APG のプログラムに関与している余暇センターは、その多くが美術館との連携プログラム APM と、ヨーロッパ写真センターとのコラボレーションに携わっている。APG のコーディネーターによれば、2014 - 2015 年は 50 あまりの余暇センターが参加した。2013 年 - 2014 年（48 センター）、2012 年 - 2013 年（81 センター）、2011

年－2012年（75センター）、2010年－2011年（91センター）と比較すると、APMに参加する余暇センターは減少傾向にある。APMに参加できる余暇センターは限られているため、区の大きさや子どもの数に応じて、パリ市学校教育課DASCOが学校教育課の支部CAS/CASPEそれぞれに対する空席配分を決める。その後各支部は、余暇センター責任者に対しプログラムの提案を行う。余暇センターの責任者は、所属するアニマトゥールの能力や専門性を勘案して、当該センターがそのプログラムに参加するかどうかの意思表示を行う。このように、APMへの参加は強制ではなく、余暇センターの自由な選択にゆだねられているが、それゆえに参加するセンターが固定化するおそれもある。

APGのコーディネーターによれば、どの余暇センターが美術館とのコラボレーションに参加するのかが決まると、美術館の教育部門担当者と余暇センターのアニマトゥールとの間で共同会議が行われ、各アニマトゥールは美術館側の担当者と個別に連絡を取り合うことになる。余暇センターの子どもたちは美術館やアトリエを訪れ、作品にまつわる物語などを聞く。その後余暇センターに戻り、見てきた作品を再び振り返り、本などで理解を深め、子どもが共同で作品の制作に取り組むことができるように準備をする。各自がそれぞれの作品を制作するのではなく、余暇センターでひとつの作品作りに全員が参加する。仕上げの段階では美術館側の担当者が余暇センターを訪れ、作品に変化を加えたり、アドバイスを与えて方向付けを行ったりする。先に紹介した「写真レンズ」プログラムと同様に、2010－2011年は「水の流れに沿って」、2013－2014年は「ベルエポックのパリ」など、毎年特定のテーマがあり、最終的に子どもが共同制作を行った作品は、市立美術館など展示会場で公開される。作品には絵画、切り絵、貼り絵、これらの組み合わせなどの平面のものもあれば、人形、屏風、さまざまなオブジェなど立体のものもある。

このように、APGにおける作品の制作は、個別の子どもがそれぞれ個人的な作品を残すのではなく、さまざまな出自をもつ参加者としての子どもが、共同でひとつの作品を作り上げる過程である。これは参加者全員による協同作業という点で、文化実践に存在する異なる社会カテゴリーの境界線を越える試みであると考えられる。

フランスでは2013年から2014年にかけて小学校の授業時間割編成が全国的に見直されたことにより、多くの市町村において、水曜日の午前中に授業を行い、そのかわりに別の曜日の授業時間が削減されることになった。このため学校が早めに終わる日が生じ、学校終了時には仕事があって迎えに行くことのできない親のために各市町村は子どもを預かる制度をつくることになった。パリ市では水曜日の午後から余暇センターの活動を行い、これまで存在しなかった火曜日と金曜日の15時から16時半の

いわゆる放課後時間に「学校周辺活動」を提供することになった。この活動に参加するか否かは親にゆだねられているが、多くの親は子どもを預けざるを得ないのでこの活動を利用しているという。アニマトゥールのひとりは、子どもはこの活動において自分とは異なる他者と交流し、開かれた態度を形成し、共に生きることを学ぶと述べている。パリ市の時間割編成見直しプロジェクト関係者によれば、パリ市ではこの活動を 2013 年から始め、主にアニマトゥールとアソシエーションをその担い手とした。アニマトゥールはこれまでも余暇センターでの活動を行ったり、既存の放課後学校周辺活動（16 時半から 18 時）を行ったりしてきたため、活動の実施そのものが難しいということではなかったという。

教育社会学分野の研究においては、子どもの出身階層に応じた「教育の不平等」の問題は、授業が行われる学校の時間のみならず、授業後にどのように時間を過ごすかにおいても顕著にあらわれると考えられている¹²。公的機関による現在の放課後や余暇の制度はさまざまな外部的条件によって形成されたものといえるが、参加者である子どもたちにとっては、社会カテゴリーから解放されるための文化的実践の場となる可能性を秘めている。

おわりに

本稿では、パリ市による子どものための芸術文化活動 APG を取り上げ、その目的、参加者、作品の制作プロセスなどを明らかにした。そこでは子どもたちを文化実践へと導くのみならず、文化そのものの序列化を解消して民主化しようとするはたらきが認められた。APG の実践にはさまざまな制度的な課題が残されているが、参加者である子どもたちが制作プロセスの協同作業において文化実践における社会カテゴリーから解放されるという効果は極めて重要であると考えられる。

本稿には以下の課題が残された。第一に、参加者と作品・制作活動の関係を十分に解明できなかった。とりわけ参加者が作品制作や作品をどのように受けとめているかを明らかにするためには、参加者としての子ども、親、文化施設、教育機関、職員などに対する聞きとり調査が必要であろう。第二に、目的として掲げられたことがらが実際にどれだけ達成されたかを明らかにすることである。これについても、子どもたちのその後の活動の継続や意識の変化について、さらに時間をかけた調査が必要であろう。

-
- 1 Antigone Mouchtouris, *Sociologie du public dans le champ culturel et artistique*, L'Harmattan, 2014, p.52
 - 2 *Ibid.*, p.117
 - 3 APG コーディネーターは、芸術文化機関と子どもが参加している教育機関（ここでは余暇センター）の両者間の調整を行う。本稿は2014年8月18日～8月27日までのCAS1/2/3/4事務局の訪問とCASの紹介で訪問した余暇センターの訪問にもとづいている。
 - 4 Mairie de Paris, « Charte éducative des activités périscolaires ».
 - 5 コンセルヴァトワールは、文化や環境を保全・維持する機関。ここでは音楽、舞踊、演劇などの専門教育を担うフランスの教育機関。文化省管轄の国立コンセルヴァトワールはパリとリヨンに存在する高等教育機関（Décret n° 2009-2010 « MCCH0812233D », Code de l'éducation L759-1）。パリの市立コンセルヴァトワールは、2区、3区、6区を除く17の区にそれぞれひとつずつ設置されている。
 - 6 この活動のタイトルは、大文字の挑戦（le pari en lettres capitales）と首都パリ（le Paris capitale）をかけたことばあそび。
 - 7 Marie de Paris, « Objectif Photo : Le Pari (s) des enfants », 2012.
 - 8 パリ市ウェブサイト « L'art pour grandir » http://www.paris.fr/accueil/societe/l-art-pour-grandir/objectif-photo-le-pari-s-en-lettres-capitales-des-enfants/rub_9651_dossier_85171_port_23756_sheet_24682 (2015/01/31 アクセス)
 - 9 表1「成長のための芸術 2013 - 2014 年の諸プログラム」における「美術館の国で」に挙げられている文化施設のほか、ノートルダム寺院前の広場の地下礼拝堂、カタコンブ、バルザック館、ガリエラ宮（服飾美術館）がある。
 - 10 Circulaire n°2010-032 du 5-3-2010 (MENE1003709C) « Charte nationale : la dimension éducative et pédagogique des résidences d'artiste », B.O. n°10 du 11 mars 2010, site internet de MEN <http://www.education.gouv.fr/cid50781/mene1003709c.html> (consulté le 02/02/2015)
 - 11 Circulaire n°2008-059 du 29-4-2008 (MENE0800388C) « Développement de l'éducation artistique et culturelle », B.O. n°19 du 8 mai 2008, site internet de MEN <http://www.education.gouv.fr/bo/2008/19/MENE0800388C.htm> (consulté le 02/02/2015)
 - 12 Agnès Henriot-Van Zanten, « Stratégies utilitaristes et stratégies identitaires des parents vis-à-vis de l'école : une relecture critique des analyses sociologiques », *Lien sociale et politiques*, no.35, 1996, pp.125-135.

付記

本稿は JSPS 科研費 25870878 ならびに 2014 年度南山大学パッヘ奨励金 1-A-2 の助成による研究成果の一部である。